「労働観」ではなく、「勤労観」を

東洋大学経営学部 非常勤講師
玉川大学 教師教育リサーチセンター 非常勤講師
千葉吉裕

内閣府が全国の16歳から29歳までの男女に、仕事の目的を聞いたアンケートがある。その一番は、「収入を得るため」という回答だ。二つまで回答できるしくみなので、もう一つは次のいずれかを選んでいる人が大多数の結果になっている。「仕事を通して達成感や生きがいを得るため」「自分の能力を発揮するため」「働くのがあたりまえだから」「人の役に立つため」。

この結果を、あなたはどう考えますか？

職業には、「生計維持」「個性の発揮」「社会的連帯の実現」という三つの側面があるとされている。これは、渋沢栄一の孫である尾高邦雄（東京大学文学部名誉教授）氏が戦前から主張してきたものだ。この職業の三要素から、アンケート結果をみれば、職業を通じて働くことは「生計維持」に偏り、「個性の発揮」「社会的連帯の実現」という側面が希薄になっているように感じる。

人生100年時代と言われるようになり、若者は変化の激しい中、長い職業生活を過ごすことになる。働くことを単に金を稼ぐための手段としてしまうと、人生の彩りを欠くことにもなりかねない。まして嫌々働くのでは人生をつまらないものにしてしまう。今、work as lifeと言われるように、仕事と生活を一体化し、仕事を通じて喜びや楽しみ、充実感や達成感を得るようなものにしなければ、人生を豊かにすることはできないとされている。アンケートの結果をみると、若者は働くことを生計維持の手段としか考えていないか心配になってくる。

学校教育において、勤労観の形成は重要な教育目標に一つになっており、学校行事、学級活動やホームルーム活動、総合的な学習の時間などで実践が行われている。これらの実践を通して、子どもたちに勤労の尊さや生産の喜びを体得させるとともに社会奉仕の精神を養うことに努めている。しかし、本来これらの体験は、家庭や地域が果たさなければならないことではなかろうか。職住一体の家庭では、一家総出で働くことがあるし、すべての家庭には家事手伝いがある。学校での教育実践より家庭教育の実践のほうがはるかに効果的であることは想像できよう。今日、社会は大きく変化し、それにより家庭や地域社会を大きく変えてしまった。そして、働くことの意義を家庭で体感する機会が減りつつある。それを踏まえて、学校では体験の機会を確保し、充実させている。かつて意識することなく日常で体験していたものを、教育内容として学校で体験することは、子どもたちへの影響は少なからずあろう。

文化の側面から働くことを考えてみよう。キリスト教では「働くことは苦役」と聖書に記されており、働くことを他者に強要する奴隷制度が他国には存在している。一方、日本では神様自ら働き、働くことを神聖で尊いものと捉えている。八百万の神々は天上界で農業や漁業に勤しんでおり、神々の行いを自分たちが行えるという尊さや喜びを感じるという伝統が存在しているのが日本である。役所や御所で働くことは「仕える」と言い、武家や商家で働くことは「奉公する」と言っていた。「仕える」も「奉公する」も働く側に主体がある言葉遣いであり、「雇われる」といった受動的な態度ではないことも特筆すべきことだろう。

法律をみると、日本国憲法にも教育基本法にも「勤労」という言葉が用いられており、「労働」という言葉は一切用いられていない。古来から用いられていた「勤労」という言葉が、日本の最高法規に記されていることは非常に重要だ。

明治時代になって登場したとされる「労働」という言葉は、近代化にともなって出現した。明治時代の海外の書籍の邦訳をみると、働くことを金銭と交換できるモノとして取り扱う時、「勤労」ではなく「労働」を用いているように思う。英語では「勤労」にworkをあて、「労働」は、厚生労働省の英語表記からもわかるように、labourをあてている。labourという言葉を明治時代、機械的に「労働」と訳したのかは英語の専門家に任せたいと思うが、当時訳者はlabourが日本で伝統的に用いてきた「勤労」のニュアンスと異なっていたと感じたのだと思う。

働くことを子どもたちにどう教えるのか。これは非常に重要なテーマである。それは、要領よく稼げるようにすることではない。収入を得る手段としてのみ働くことを捉えるのではなく、生きがいややりがい、喜びを感じさせること、それが勤労観の形成である。内閣府のアンケート結果をみると、「勤労観の形成」が、優秀な稼ぎ手としての労働者の育成になっていないか心配になってくる。